

地域農業を 元気にしながら、 生涯現役！

90歳まで働こうと決めました

60歳の平均余命は男性22年、女性28年。60歳で退職した後、男性は平均で82歳まで生きられますが、大病をせず、元気に過ごせば90歳を超えることも十分可能でしょう。

私は定年退職の約半年前、再就職のお話をいただきました。年金が出るまでの3〜4年間勤められるということで、大変ありがたく思いました。私には当時100歳の伯母がおり、その伯母がいながら低い目標をたてるわけにもいかない。そこで私なりの人生設計として、90歳までは元気に活動し、その後を余生として生きようと考えました。

では、定年退職後の30年間をどう有意義に生きていくか、思案のしどころでした。先輩諸氏の様子は、旅行やゴルフあるいは絵画等の趣味に生きる方も見られましたが、私の性分には合わないものでした。

私は農業技術系職員として農家指導や試験研究、農林行政等、37年間にわたり農業に関わる仕事に就いてきました。しかし、農作物を自ら生産した経験は少なく、実践面では今ひとつ物足りなさを感じていました。自分の手で農作物を作り、技術をもう少し極めたいという微かな願望は以前から心の片隅にあったように思えます。

また、農業従事者の高齢化と遊休農地の拡大により荒れ放題の農地が増える



北岡 美明

「埼玉元気農業塾」代表

【きたおか よしあき】1946年、三重県生まれ。1969年埼玉県職員となり、農業改良普及員、茶業試験場長、農林部副部長、農林総合研究センター所長等を務め、2006年に定年退職。その後、すべて借地で農業を始め、比企郡滑川町で「埼玉元気農業塾」を主宰して遊休農地の開墾、新規参入希望者の相談や研修、農業体験の受入等を行っている。

一方で、農業外からの新規参入希望者が増えている状況も目の当たりにしてきました。同時に、融資を受けて農業を始めたものの数年でやめてしまった人や、中には夜逃げをした人がいることも耳にしました。「夢を描いて農業に新規参入した方にとってもし相談に乗れる人がいたら、少しは助けになったのではないか」という心の痛みは、ずっと残っていました。遊休農地が年々増えていることも、私にとって宿題をやり残していることのように感じていました。

いよいよ退職まで3カ月となり、再就職の返事の期限が迫ってきました。「雇われの身では間もなく放り出される。一度限りの自分の人生、自分自身で切り開くしかない。不器用な自分にできること



は今までの僅かな知識・経験を生かすほかにない。世界の食糧危機も迫っている」そう考えた私は、90歳までは現役で農業に従事し、医者のお世話に極力ならず元気に働くこと、遊休農地を新規参入者で耕作し地域農業を元気にしようという覚悟を決め、自営の道を選びました。

まずは自分自身が 農業新規参入

2006年3月末に退職辞令を受け、37年間の公務員生活に別れを告げました。その翌日から知り合いの農家で遊休農

地の開墾実習をさせていただくことになりました。と言っても、農地でチェーンソーや草払い機等を駆使した一人での作業です。

同時に、農家要件を満たすために50㎡以上の農地を借りられるよう町や県の窓口にお問い合わせをしました。1カ月経っても進展ゼロだったため、車で30分ほどの知り合いの農家に打診し、1週間後には5戸の農家から合わせて60㎡の畑が借りられるよう段取りをつけていただきました。その後、町の農業委員会に利用権設定を申請し、無事許可が下りて農家としての第一歩を踏み出せることになりました。

私は在職中、農地確保をはじめ何の準備もしていなかったため、全くの新規参入者としてゼロベースで当たりました。やはり第一の関門は農地の確保でした。

畑を借りたものの背丈を越す草が生い茂り、樹木まで生えた耕作放棄地。一人で黙々と開墾作業に当たり約7カ月を要しました。しばらくすると隣の遊休農地の地主さんから「ここも使って！」と声が掛かりました。こうして少しずつ耕作地が広がり、開墾作業も1年に延びるこ

その後、野菜栽培と休憩室を兼ねたビニールハウスを作り、中古の耕耘機を購入して栽培を始めました。作付けたものは、ジャガイモ、カボチャ、人参、キュウリ、トマト、ナス、漬け物用ウリ、キュバツ、カブ、大根、白菜、ピーマン、オクラ、ゴマなど多彩な品目ですが、こだわったのは「美味しさ」です。伝統品種や、同じ野菜でも数種の品種を比較栽培して、作るものを絞り込んでいきました。

生産物の売り先として、すぐ近くにあるスーパーとJAの直売所に申し入れを



ハウスでは、主に小松菜を周年栽培をしています

しました。

スーパーは生産者との直接取引ではなく精算事務等を行う別の業者を介して出荷するシステムでした。後になって分かったのですが、業者に加えさらに2社が介在し、それぞれが手数料を取っていました。外からは見えない実態を垣間見た思いで、驚きでした。

J A直売所については、すぐ承認されるものと思っていました。農家代表が入った委員会での審査の結果は「保留」。翌月も翌々月の委員会でも保留が続き、最終的には新規参入や遊休農地の解消を推進する町役場の指導助言もあって承認されましたが、結局、6カ月の期間を要しました。「良い農作物を出荷されると、自分たちの農作物が売れなくなる」といった意見が出ていたようです。新規参入の第二関門は販売です。

「埼玉元気農業塾」スタート

畑の整備が完了し、野菜の出荷も少しずつできるようになったところで、「埼玉元気農業塾」をスタートさせました。「農業外からの新規参入者によって農業を元気に、また農業に取り組むことによって心身を元気に」との願いを込めた私塾です。

運営の全ては私一人で始めました。ホームページも60の手習いでパソコンと格

闘しながら作りました。始める前は「新規参入者が円滑に就農できるように相談に乗ったり実地研修ができればいいな」と気楽に考えていましたが、ホームページを見たり、県の農業関係機関から紹介されたりして、実にいろいろな人が訪れてきました。

定年退職した方は「家でぶらぶらしても仕方ないので、たとえ月10万円程度の小遣い稼ぎでもいいから農業をしてみたい。ついては、ここで実習をさせてほしい」といった人が結構多くいらつしやいました。しかし、今までに3日以上続いた高年者は唯一人。土にまみれて大汗をかきながらの仕事は、想像以上に厳しいものと映ったようです。定年後はのどかな農村風景の中で、ゆつたりと楽しみながら少々のお金も稼ぎたいという牧歌的な夢を描いている方が多いようです。実際に農業で稼ぐには体裁を気にせず、とことんやり抜く覚悟と行動が必要なのですが、一方、20〜40歳代の新規参入を希望する男女も受け入れてきましたが、こちらには本気で取り組もうとする人が多く見られます。若年者のネックは「資金」。日々の生活費と農業機械や資材等の購入費が意外と掛かります。アルバイトをしながら自営農業を目指して研修を続けている人もいます。自立に向けて一人で野菜栽培に挑戦する人には、畑と機械器具等を貸し、アドバイスをして励ましています。



当塾で2年間一緒に取り組んでいる方は、農地を60㍓ほど町の農業委員会の許可を受けて借りることができ、農家となりました。併せてJ Aの直売所にも出荷できることになりました。

休日に農業体験をしに来る方もいます。いずれも特別のカリキュラムがあるわけではなく、その日の作業を一緒にしていただいています。そしてお昼を食べながら農業談義に花を咲かせています。

当塾には何の決まりもありません。研修も体験も無料です。質問には答えますが、一方的に教えることはありません。いつ来ても、何時に帰ってもOK。帰りには野菜のおみやげ付き。

しばらく当塾で実習をした後、農業大

児童養護施設の子どもの体験実習（写真上）
調理師養成専門学校生の農業体験実習（写真下）



学校に入った方、トマト専門の農家に研修に行った方、農業法人に就職した方など様々。昨年定年退職された方は健康管理のため、報酬ゼロ・手弁当て週3日農作業のお手伝いに来てくださっています。「楽しいから、ずっと来させてください」といろいろな人が入ってきたり、出て行ったりしています。

こっぴど こっぴど

「埼玉元気農業塾」では児童養護施設の小・中・高生を月1回程度招いて農業体験教室を開いています。広い農地を自由に走り回るだけでも子どもたちは元

気になり嬉々として楽しんでいきます。園長さんは、「子どもたちの居場所ができたようだ」とおっしゃっています。

自閉症の定時制高校生をインターンシップという形で受け入れたこともあり。週5日、各2時間の野菜収穫作業をしてもらったところ、1カ月も経たない頃から表情が明るくなり、自ら話すようになって、先生もご両親もびっくりされています。

草木がうつそうと生い茂った遊休農地を大汗をかいて畑に復元すると、地域の方々から喜びの声が掛かり、またこれが刺激となって自ら草木を切り払う農家が出るなど、コミュニティづくりに波及効

果が見られます。

私自身については、小指ほどもあった胃のポリープ4個が農業を始めて1年半ですっかり消え、お医者さんもびっくり。ウエストも3cm細くなり、21%あった体脂肪は15%ほどになって、人間ドックでの指摘事項がなくなりました。医療費の軽減につながれば社会貢献にもなります。

人生に定年なし

長く勤めた公務員生活からがらりと変わって、赤銅色に日焼けした「農家のじいさん」が板に付いてきました。今までの勤め人生活から一転しての自営業。日々様々な問題に遭遇しますが、生きていく実感がある毎日です。一生働こうと決めたことは間違っていないかと思っています。

現在、全部で1・5畝の畑と10棟のビニールハウスで小松菜の周年栽培のほか多彩な露地野菜を作っていますが、生産技術の工夫改善や新たな販売方法の実践、新規参入者のネットワーク作りと家計確保の実証、地域の人々とのコラボによる新たなコミュニティづくりなど、チャレンジしたい課題は増えるばかりです。「埼玉元気農業塾」に協力して取り組んでくださる、定年退職者の方をお待ちしています。